

## 『青樹』掲載作品の選考について

図書館長 森 貞

私は「洋楽」が好きで、授業でも、リスニング演習として、歌詞の聞き取りを取り入れている。私が、「洋楽」を用いた英語の勉強に興味を持つきっかけになったのは、ブラームスの「大学祝典序曲」が冒頭に流れる『旺文社大学受験ラジオ講座』（30分の講義が2講義分放送される1時間のラジオ番組「1952放送開始〜1995放送終了」）において、松山正男講師が担当していた「英語の歌を通して英語を覚える」という講座を聞くようになったからである。英語に関しては、英文解釈、英作文、英文法の講座も開講されており、高校3年生の受験生としては、こちらの講座をしっかりと受講すべきであったが、毎回欠かさず受講したのは、松山講師の講座だけであった。

その「洋楽」好きが高じて、6年前から、校内で『歌える翻訳コンテスト』を開催している。「歌える翻訳」とは、英語の歌詞を原曲のメロディに乗せて歌えるように日本語に翻訳した歌詞のことを指す。応募に際しては、日本語歌詞を書き込んだ電子文書ファイルと日本語歌詞を吹き込んだ電子音声ファイルの2つを提出してもらい、審査員（教員6名で構成）は、日本語歌詞を見ながら音声を聞いて審査を行うことになる。作品募集の案内文書には、「歌える翻訳」を作る上で大切な点は、英語の歌詞が持つ情感やイメージを維持しつつ、大胆かつ柔軟な発想力を駆使して、メロディに乗る日本語の語彙を選択することである旨を明記し、そのような観点から、審査員は応募作品を審査する。第2回コンテスト以降は、「歌える翻訳」を審査委員長が教科を担当するクラスの夏季課題としたことで審査対象作品が大幅に増えたために、現在は、審査委員長による第1次審査と審査委員5名によ

る第2次審査を経たのちに入賞作品を決定することになっている。

ところで、『青樹』に掲載される作品も、2回の選考を経て、その掲載が決定されていることはご存知であろうか。『青樹』に掲載される作品のほとんどは、元々は、国語科が夏季休暇の課題として学生諸君に課したものである。国語科教員は、提出された課題を丁寧に読み込み、「読み物」として『青樹』への掲載が可能と判断した作品を校友会誌編集委員会事務局に送付する。これがいわゆる第1次選考である。この第1次選考であがってきた作品を、校友会誌編集委員会メンバーが回読し、最終的に、掲載作品を決定する（第2次選考）。

今年度は、国語科の先生方をお願いをして、例年、手書き原稿での提出であった課題を電子文書ファイルで提出するように学生に周知いただいた。校友会誌編集委員会では、これまで、第1次選考を通過した手書き原稿を、ほぼ均等な数で分けて、5つにグループ分けされた編集委員の代表者に配り、グループ内で回覧する形で回読作業が行われていた。この方法では、ひとりひとりがじっくりと原稿を読む時間が確保できない（電子文書ファイルであれば、USBメモリースティックを用いて編集委員に配布可能となる）ことや、印刷所に手書き原稿を渡しているため、（判読が難しい文字が含まれているせい）活字原稿に間違いがあり、その訂正作業（校正）に時間がかかるといったことが以前より指摘されていた。そこで、編集作業の改善の観点から電子文書ファイルでの提出をお願いした次第である。ご協力いただいた国語科の先生方並びに学生諸君には心よりお礼申し上げます。

第2次選考では、A・B・Cの判定基準で評価がなされ、Cの判定がついたものについては、協議の上、最終的には編集委員長がその掲載の可否を決定する。毎年、数は少ないものの、C判定がつく作品がある。「読み物」としては面白いが、一部の表現や内容が『青樹』という公的な刊行物への掲載にはそぐわないという理由で掲載不可にせざるを得ない場合もある。そうであれば、該当の表現や内容を削除して掲載すればよいではないかという声も聞こえてきそうであるが、その該当の表現や内容があってこそその作品であるため、話はそう簡単ではない。『歌える翻訳コンテスト』の審査では感じたことのない葛藤が、『青樹』の編集作業（掲載作品の決定）には確かであった。責任の重い仕事であるをつくづく感じている。